

朴花居

<第33号>
2025年11月発行

川上澄生美術館 友の会だより
〒322-0031 栃木県鹿沼市睦町287-114
TEL 0289(62)8272 FAX 0289(62)8227



川上澄生《丸ノ内曇日》1929年（昭和4）

木版多色刷 紙 「新東京百景」(1930年)創作版画倶楽部 限定50部 鹿沼市立川上澄生美術館蔵

丸の内

曇日の丸の内、建物の色は埃を吸取った。街路樹の葉は埃で薄化粧をして居る。東京驛の建物は汽車の煙で燻されて居るやうな気がしてならない。

街路には靴の音、下駄の音、足駄の音、フェルト草履の音、地下足袋の音、ゴム靴の音、電車のきしる音、自動車の爆音、撒水車の後部から心太をつき出すやうに一齊にほとばしる水の音。

街路には紳士の群、貴婦人の群、労働者の群、職業婦人、ちよいと外に出た帽子を被らない會社員、銀行員、また呑氣な都會見物人。

〔版画CLUB〕第1年第1号／
昭和4年4月15日）

上の文は、創作版画倶楽部の版画

集『新東京百景』のうちの《丸ノ内曇日》について、川上澄生が自身の作品に添えた一文です。創作版画倶楽部は中島重太郎を主宰として結成された版画団体で1929年から4期にわたり活動し、会員に頒布する版画集『新東京百景』などを刊行しました。

この文章が添えられることで、作品は単なる都会の一景にとどまらず、そこに時代の息づかいが感じられ、当時の東京の空気が生き生きとよみがえってくるようです。

なお、この作品は前回の企画展「東京回顧版画展」でも展示されましたので、会場で実際に作品をご覧になった方も多かったのではないのでしょうか。

「対話型鑑賞会」をご存知ですか？複数人で作品を鑑賞し、感じたことや考えたことを言葉で共有しながら作品への理解を深める鑑賞方法です。美術作品だけでなく、様々な分野で応用できるコミュニケーションスキルを養うこともできるものです。

川上澄生美術館では、今季は6月から夏休み期間にかけて小さな子ども達や親子連れを中心に、芸術をより気軽に楽しんでいただける様に、対話型鑑賞会や多様なワークショップを企画開催しました。

芸術鑑賞への扉
対話型鑑賞会
ワークショップ

豆本を作ろう
ワークショップ



企画展「語り継がれる寓話と神話展」では子ども達に親しみのあるイソップ童話をテーマとした作品が展示されたことから、ワークショップ「豆本を作ろう」を開催し、子ども達に小さな小さなイソップ童話本作りを楽しんでもらいました。

はじめての
びじゅつかん



また、幼稚園や保育園の園児対象の「はじめてのびじゅつかん」では齋藤館長、鹿沼版地域おこし協力隊の保坂朱音さんを講師に対話型鑑賞会を開催、市内より2団体の参加がありました。通常は静かに鑑賞しなくてはならない美術館は小さな子ども達や保護者には敬遠されがちですが、この時期にこそ芸術を鑑賞することの楽しさを知ってもらいたいと企画されました。最初はかしまつていた園児たちも、口々に見て感じたことを夢中になって話しながら、楽しく賑やかに鑑賞しました。

「夏秋草図屏風」
「風神雷神図屏風」
鑑賞会

国立博物館収蔵の重要文化財、酒井抱一筆「夏秋草図屏風」と尾形光琳筆「風神雷神図屏風」は、実際はガラスごしにしか見ることができない芸術作品です。このレプリカを借りて行われた館長企画の対話型鑑賞会では、レプリカだからこそ間近に眺められる大変貴重な機会となりました。大人も子どもも顔を近づけ、それぞれ気づいたことや感じたことを話しながら、じっくりと深く鑑賞しました。



夏休み スペシャル ワークショップ



話を通じて話し合い、考え、嬉々として表現していく姿に、子ども達の成長に与える芸術の力を感じました。

国立印刷局 ワークショップ

国立印刷局の工芸官を招いて開催した特別講演会では、お札(さつ)の印刷の秘密を分かりやすく映像を交えて解説、ワークショップでも工芸官による実演や鹿沼オリジナル版を使った印刷体験という貴重な機会にキャンセル待ちが出るほどの人気となりました。



保坂朱音さん



いくために多種多様な才能を発揮し活躍していただく制度です。

対話型鑑賞会開催のキーマンである「鹿沼版地域おこし協力隊」保坂

朱音さんをご紹介します。

保坂さんは、東京芸術大学で陶芸を専攻し、同大学院では美術教育を専攻した陶芸作家です。工芸は生活上にあるとても身近なもの、それ子ども達への初めの一步として、興味のない人や苦手に感じている人にも広く教えられる人になりたいと

これにはミッションがあり、保坂さんの場合は栗野地区を中心とした鹿沼市の文化芸術振興、支援活動を行い、また陶芸技法を用いて、鹿沼市内の文化や産業を取り入れた制作活動を行うというものです。陶芸作家として鹿沼土を陶芸の釉薬の材料にすることを考え、成分の配合バランスを試行錯誤しながら調査し、現代の食卓に馴染みやすいシンプルな風合いを目指しています。また、子ども達が気軽に楽しく芸術を楽しむために鹿沼市内で造形ワークショップも開催しています。現在、大学の仲間とともに作家グループを結成し、さまざまなアーティストが共同で作品制作を行える環境を整備中とのこと、これからの活躍が楽しみです。

教員免許や学芸員の資格も有し、2年前に地元に戻り、地域おこし協力隊に任命されました。地域おこし協力隊とは、都市圏から地方へと積極的に人材を受け入れ地域協力活動を行ってもらい、地域力の維持・強化を図って

川上澄生美術館では、このような人材や他機関などの協力によりこれからも市内唯一の美術館として芸術に親しむ様々な機会を提供し続けるでしょう。ご期待ください。

夏休みスペシャルワークショップ「イソップの世界に触れてみよう」は、友の会が主催開催しました。小学校低学年20名が参加し、まず保坂朱音さんの対話型鑑賞会により作品のイメージを膨らませ、美術館隣りの文化活動交流館創作工房室へ。埼玉を中心に芸術活動を行っている薮内研二さんの指導で工作、ユニークな楽器の音色に合わせて自由に演じるといふ表現を楽しみました。初めて会った子ども達がいそ

贈る粋、伝える雅

木版で結ぶ心 ポチ袋と千社札の美



6月25日～8月31日まで1階展示ホールにて開催され、色とりどりの小さなポチ袋や千社札が額に整然と並べられ、展示会場に所狭しと飾られている様子は圧巻でした。

祝儀や心づけなどの際に用いられる小さなポチ袋ですが一つひとつが木版で出来ており、その繊細な彫りと色彩、そのデザインの様多様にただ感心するばかりです。

日本では古くから金銭をそのまま手渡すことは不作法とされ、ささやかな謝意の表明など日常的な贈答には簡素なポチ袋が用いられるようになります。芸妓や舞妓、歌舞伎役者の間では洗練された意匠の袋が心づけのやり取りに用いられ、贈答の美学が深められていったとのこと。松竹梅、鶴亀、七福神、宝尽くしなどの縁起物、季節の草花や言葉遊びを盛り込んだ図柄は贈り手の趣味や洒落心をさりげなく表現しています。

千社札は社寺への参詣を記念し、自身の名や屋号を記した札を社殿や門に貼るといふ、信仰に根差した風習



ポチ袋

から生まれました。「千社」の名が示すように数多くの社寺を巡りながら札を納めるという事は信仰の証であるとともに、旅の記録、さらに自己表現の意味が込められていたようです。江戸中期以降納札文化は次第に洗練され趣味としての性格を帯びてゆき、製作には浮世絵と同様の木版画技法が用いられ精緻な線描や多色刷りといった技法が駆使されました。札のサイズは携行しやすく貼りやすいもので、やがて千社札は参詣の記念品にとどまらず贈答や交換を目的とする創作へと展開し、持ち主の美意識や洒落のセンスが反映された図柄は江戸の「粋」を体現するものとなります。

書肆秋櫻舎の4,000点のコレクションから齋藤館長が新鮮な切り口で選りすぐり、1枚1枚額に並べてゆくという気の遠くなるような作業の繰り返しでこの展示が出来上がりました。

ポチ袋も千社札も小さいながらも一つひとつがとても繊細で美しく面白く、ユニークなものばかり、江戸文化の「粋」と「雅」を十分堪能できる展示となりました。



千社札

川上澄生美術館
友の会ツアー

6月5日(木)友の会ツアーは、37名の参加を得て茨城県北茨城市を訪れました。

はじめに、磯原海岸沿いに建つ野口雨情記念館へ行き、参加された皆さん一同、雨情の童謡の世界にノスタルジーを感じているようでした。前庭にある仕掛けでは、童謡が流れるなか飛び立つシャボン玉にはかなさを感じたのは私だけではなかったのではないのでしょうか。

次に、近くにある雨情生家では、雨情の孫にあたる不二子さんによる熱のこもったお話を伺うことができ、参加者も熱心に聞き入っていました。楽しみな昼食は、目の前にある「としまや月浜の湯」にて海の幸を味わい、特にメヒカリのから揚げは絶品でした。昼食後、バスにて茨城県天心記念五浦美術館へ向かいます。美術館は、岡倉天心記念室も併設され、近代日本美術の発展に大きな功績を残した天心の生涯を紹介しています。企画展として、浮世絵展が開催されており、歌川広重・国芳・国貞など、たくさんの浮世絵が展示され、江戸の風景や人々の暮らしが、現在の私たちの生活や文化に通じるものを見出すことができました。

帰路の途中、海産物店に立ち寄り、海の幸などを買

ち寄り、海の幸などを買求め、思い思いに楽しかった一日を振り返っていました。



次期展示のご案内

12月13日(土)～1月12日(月・祝)「清親と安治の東京名所展」が開催されます。那珂川町馬頭広重美術館はただ今改修工事のため休館中ですが、川上澄生美術館にて出張展示をすることになりました。所蔵品の中から光と影を巧みに表現した浮世絵「光線画」を発表し、明治期に活躍した浮世絵師の小林清親とその画風を受け継いだ弟子の井上安治の作品を展示いたします。

同時期1階ホールでは「版画で楽しむクリスマス」を開催します。「クリスマスに版画を贈ろう」を合言葉に開催された現代版画の展覧会「リトル・クリスマス展」(平成22年から10年間開催)寄贈作品と川上澄生作品の中からクリスマスード漂う作品をご紹介します。ぜひ美術館まで足をお運び下さい。

編集後記

前年度、川上澄生美術館友の会には若手の役員が加わり、活動に新たな視点と活力がもたらされました。また、多くの方に気軽に足を運んでいただける美術館を目指し、館内設備の充実やミュージアムショップの魅力向上などにも取り組んでいます。新たに学芸員を迎えた今、齋藤館長のもとで川上澄生美術館が鹿沼の文化を発信する拠点の一つとして、さらに力強く歩みを進めていくことを願っています。